

【人権協だより】

問合せ先：貝塚市人権啓発推進委員協議会事務局(人権政策課内) ☎072-433-7160

「誰か」のことじゃない。

12月4日～10日

人権週間

貝塚市人権啓発推進委員協議会(人権協)は、市民一人ひとりの人権意識の確立と高揚を図ることを目的に設立され、人権尊重のまちづくりを進める啓発活動を行っています。

この1年間は「2020人権を守る市民のつどい」(下記)をはじめ、じんけんセミナーとして「性の多様性を知る～違いを認め合える社会へ～」(10/4)、「多民族・多文化共生社会とは～ヘイトスピーチ問題から考える～」(10/11)、「女性の人権～自分らしく生きる～」(10/15)、「差別をしない社会にむけて～部落差別の現状と課題～」(10/26)、「インターネットと人権」(11/5)をテーマに開催しました。

2020 人権を守る市民のつどい

「輝け!みんなの大事な命」

フリーアナウンサー・記者 藪本 雅子 さん

昨年12月に開催した「人権を守る市民のつどい」は、フリーアナウンサー・記者の藪本雅子さんをお招きして、ハンセン病問題を中心に「輝け!みんなの大事な命」というテーマで、ご講演いただきました。

藪本さんは、京都で生まれ、早稲田大学教育学部を卒業後、日本テレビへ入社、バラエティ番組から報道番組までをこなされるアナウンサーとして活躍され、ハンセン病問題の取材をきっかけに報道局へ転向、フリーアナウンサー・記者となられた後もハンセン病問題や人権問題の取材や執筆などの活動されています。

2010年上智大学大学院で修士号を取得。令和元年度人権擁護功労賞 法務大臣賞を受賞されました。



【講演概要】

藪本さんは、日本テレビの売れっ子アナウンサーとしてバラエティ番組で活躍されていた時代、画面から受ける印象とは違い、精神的に追い詰められていたことを話されました。

1996年「らい予防法廃止」のニュースに触れ、ハンセン病療養所にはまだ多くの人が住んでいて、完治しているのに社会に出てこないで療養所にいるということに疑問を持ち、ハンセン病問題の取材を開始、報道局の記者に転向されました。療養所施設に何度も通い、取材を重ねるうちに、過去にどれだけの差別を受けてきたのかがわかり必ず報道しようとして決意されます。藪本さんが取材をしている中、2001年5月に熊本地裁で初の判決が言い渡され、ハンセン病患者を強制隔離した「らい予防法」に違憲判決が下されました。

判決は原告の全面勝訴で、当時の小泉総理が控訴をしないことを決定したことから、原告のみなさんが会見を開き「ようやく人間の尊厳を取り戻しました」と人間回復宣言をしました。

藪本さんは、結婚を機にテレビ局を退職し、子どもも生まれ専業主婦をしていましたが、「ハンセン病の元患者がホテルで宿泊拒否される」というニュースを見て、ハンセン病がうつらない病気だとさんざん報道したのになぜ差別が続くのか

を考えはじめ、改めて大学院で勉強されます。

差別がなくならないのは、前世の行いと現世を結びつける自業自得の考えやケガレと結びつける日本の昔ながらのおかしな因習があること、もう一つは優生思想。戦後、基本的人権を定めた憲法ができましたが、1948年に、中絶・不妊手術をしてもよい項目に「らい病」や「障害者」が含まれた優生保護法ができ強まってきました。差別とは「劣っているのに劣っている。悪くないのに悪い。汚くないのに汚い」と決めつけること。

昨年、ハンセン病家族訴訟が結審し、原告が勝訴して家族補償法ができました。請求すれば、補償金がもらえるが、請求はまだ2割にとどまっている。これは、「ハンセン病患者の家族だ」と知られることが恐怖だという差別がまだ残っている、あるいは家族を恥だと思ってきた後ろめたさからで、家族を恥だと思わされてきた家族も被害者だと思えます」と話されました。

藪本さんがハンセン病問題で20年以上こだわって関わるようになったのは、「自身の性暴力の被害経験とつながります。自分には何かが足りない、何かが壊れている感じがずっとあったが、それが性暴力被害者の後遺症だと最近わかり、自分は何か悪くないのに劣等感や罪悪感などネガティブな感情を持ち、人に心を開けなかったこと

はハンセン病の人によくあることで、持たなくてよいコンプレックスを持ってしまっていた。「世の中には、ハンセン病に限らず、LGBTの人、アイヌの人、被差別部落出身の人、在日の人、障害者：理不尽な思いをしている人がたくさんいて、当事者は高い壁の中に押し込められているが、その壁は社会が作っている、社会と一緒に壊さないといけない」と訴えられました。

性暴力被害を公表したのは、社会を変えたい、加害者が処罰される当たり前の社会にしたいという思いからで「誰か身近な人がみなさんを信頼して相談されたら、その人が言っている話をまず信じ、よく分かんなくても分かっていこうと努力し、一緒に怒ってほしい。できれば覚悟をもって一緒に戦う行動をしてほしい。そういうのがありと確実に社会が変わっていく。ハンセン病支援者が一緒に戦ってきたように、この問題を放っておけないということがあれば半歩でも前に出てほしい」と締めくくられました。

